

論文

長崎市伊王島町「伊知の会」の創作太鼓の 活動の展開とその意味

久島 桃代

Ⅰ はじめに

かつてハーヴェイ (1997) はその論考の中で、交換や移動、コミュニケーションの空間的障壁が減少しつつある資本主義という生産様式において、場所の意味は弱まるどころか人々の間でますます強まると指摘した。とりわけ 1970年頃から本格化する経済のグローバル化は、既成の工業都市の衰退等、空間の劇的な再編成を引き起こし、現実の空間の安全性が危機にさらされた場所の住民たちに、場所の意味とは何かを考えさせる契機となったと述べる (ハーヴェイ 1997: 86)。

こうしたハーヴェイの議論を踏まえ1970年以降の日本の状況のみてみると、高度経済成長期から日本の農山村では過疎化・高齢化が進み、また経済のグローバル化の進展は、既成工業地域の産業空洞化や、農産物自由化による農村の危機をもたらした (宮本 1990)。このような地域を取り巻く急激な変化は、地方自治体や地域住民の危機意識を高め、そのひとつの結果として地域の見直し、再生を目的とし、自らの地域にまつわる事象 (自然・歴史・文化等) を総合的に学習したり調査をしたりする自地域学の活動が全国各地で広まった (久島 2010)。

一方自地域学の活動が活発となろうとしていた1980年代から1990年代にかけて、郷土芸能を創出するという形で地域住民が地域と積極的に関わっていきこうとする動きが現れた。その中で出てきたのが、本稿で取りあげる創作太鼓の活動である。

日本の全国各地でにわかには生じたこうした動きは、さながら「和太鼓ブーム」(八木 1994) と呼ばれる活況を呈していた。創作太鼓のグループの中にはプロやセミプロによるものもあったが、とりわけ多かったのが市町村を舞台にして町おこしや地域文化の振興を合言葉に結成された太鼓グループである。長崎県内の創作太鼓グループを調査した八木 (1994) は、これらの創作太鼓の特徴として次の3点を挙げている。すなわち、①創作太鼓の成員が特定地区の住民であることを資格要件とせず、様々な職業に就く、比較的若い年代の人々によって構成されている点、②グループの名称や衣装、太鼓のリズム等において積極的に郷土を表象している点、③青年団や商工会、役場等の組織的支援を受けることを通じて、町を代表する郷土芸能としての存在意義を獲得している点、である。

八木は、文化はそれを保持しようとする社会や政治との関わりの中で創造される構築物であるにとらえ、そこにはイデオロギーや権力が無縁ではないと理解したうえで (八木 1994: 24)、これら創作太鼓の活動について分析を行った。そしてこうした創作太鼓の活動の多くが、これに地域の活性化や文化振興への貢献を期待する地方行政と関わるものであり、創作太鼓によって地域が表象される過程を通じて、「ふるさとの差異化と商品化がとめどなく繰り返される」(八木 1994: 43) と指摘した。だが同時に、創作太鼓という創造的な自己表現を通じて、地域住民たちが地域に意味を

与えていく過程を過小評価してはならないと述べている(八木 1994: 42-43)。

そこで本稿では、このような創作太鼓グループの中から長崎市伊王島町の「伊知の会」の活動(1987年開始, 1998年頃から活動を休止)を取り上げ、彼らが演奏していた「いおう海龍太鼓」が地域社会のいかなるコンテキストの中から生まれたのか、そしてどのような活動を行い、演奏によっていかに郷土・伊王島町を表象してきたのかを検討したい。このことを通じて、この創作太鼓の活動が担い手たちや地域住民にとってどのような意味を持つものだったのかを分析する。具体的な調査方法としては、まず文献資料をもとに伊王島町の地域の変遷を整理する。次に「伊知の会」の活動内容および「いおう海龍太鼓」の演奏内容を、2008年9月15日から19日にかけて行った伊王島町で実施したフィールドワーク(グループの元メンバーたちからの聞き取りと映像ビデオの視聴)から記述していく。さらに、「いおう海龍太鼓」を町の人々がどのように見ていたのかを明らかにするため、「伊知の会」のメンバーからの指導をもとに創作太鼓を学校教育に取り入れている地元の中学校を取材し、どのような経緯で創作太鼓に取り組むことになったのか、また「いおう海龍太鼓」を含め創作太鼓の活動に対してどのように感じているのかを聞き取った。この点についても、本稿で合わせて記述していく。

II 伊王島町の地域的変遷

1. 炭鉱の島としての伊王島町(1935~1972年)

長崎市伊王島町は長崎市の中心部・長崎港の西南の沖合10キロに位置する。長崎港から1日11便出港している長崎汽船を利用すれば、19分程度で到着することができる。行政区としての変遷を辿れば、1889年に町村制施行により伊王島と沖ノ島とが連合して伊王島村となり、1962年に町制を施行して以降、2005年に長崎市に編入されるまでは

西彼杵(にしそのぎ)郡伊王島町、それ以降は長崎市伊王島町となっている。

伊王島町の大部分は急傾斜のある瘦土に覆われ、耕作には適していない。また伊王島町では対馬暖流の影響で豊富な数の魚類を捕ることができ、大正時代にはイワシ網漁業者の遭難事故もあって、明治期以降長崎市や香焼島で工業が発達してくると、次第にこれらの地域に出稼ぎに行く人々が増えた(伊王島教育委員会 1972)。一方、伊王島町の北にある高島では幕末期より炭鉱開発が進んでおり、明治の中頃には三池と並んで国内有力の炭鉱となっていた(西原 1998)。このため、伊王島町の住民にとって石炭の鉱脈の発見は長い間待ち望まれたものであった(伊王島町教育委員会 1972)。

1935年に伊王島町で炭鉱が発見されると、1939年長崎炭業株式会社が設立され(のちに日鉄炭業株式会社に変更、以下「日鉄」)、2年後の1941年には地元住民の協力により炭鉱が開坑した。戦時中の出炭量は1944年の時点において26,000トン程度で終戦直後の混乱期には多少減少したが、1946年には31,000トン、1947年には52,000トンと急増し、1950年には107,000トン、さらに1961年には309,000トンもの出炭量となった(鈴木 2008)。こうした炭鉱業の隆盛に伴い、伊王島町の人口も急増した。島には炭鉱の職員社宅が153戸、鉱員社宅が957戸建てられ、それぞれの寮も1棟ずつ建設された。また娯楽施設としては炭鉱会館が建設され、ここでは映画や演劇等が上演された。なお伊王島町では明治期以降も医療の整備がなかなか進まなかったが、鉱業所病院が開坑以来徐々に設備を整えていくと、これまで島内で恐れられてきたチフスに対する早期治療も可能となった(伊王島町教育委員会 1972)。

炭鉱業の隆盛によって支えられてきた伊王島町の繁栄は、1960年代以降の石炭産業の凋落によって徐々に陰りをみせていった。1965年には坑内で30名の死者が出る大爆発が起き、従業員の安全を

顧みない日鉄の経営方針に対する住民たちの不満が高まった。そして1972年1月には、出炭量の減少、石灰石・炭鉱石の円切り上げによる不況、日鉄の経営不振を理由に閉山通知が出され、2カ月後に閉山した。1972年当時、町税4,300万円（1年分）のうち70%が鉱業所関係分であり、町の飲料水は鉱業所の海底水道に、また開業医がいない伊王島町では鉱業所病院に医療福祉を依存していた（前川 1990）。当時の町長（日鉄伊王島鉱業所出身）は炭鉱閉山に際し、「これからは新しい企業誘致に取り組む一方、観光客誘致などで、町勢を立て直していかねばならないが、鉱業所時代のような繁栄は、もう期待できないようだ」と語っている（前川 1990）。炭鉱の閉山は炭鉱以外に基幹産業が発達しなかった伊王島町に大きな打撃をもたらした。人口の流出に歯止めがかからなかった（図1）。

2. リゾート観光地としての伊王島町（1985年～現在）

炭鉱が閉山した伊王島町では、これに変わる就業の場を確保することが急務であった。1985年、リゾート開発誘致を公約に掲げた町長が就任し、幾度か企業誘致に失敗した結果、1989年第三セクターによる「伊王島スポーツリゾート開発株式会社」が設立された。そしてスポーツを中心とした長期型リゾート施設として「ルネサンス長崎・伊王島」がオープンした。施設内にはホテル・レストランのほか、室内・野外両方のテニスコートや室内プールも設けられた（鈴木 2008）。こうした伊王島町の選択は当時、総合保養地域整備法（リゾート法）によってリゾート開発が全国的に進められていたことの一例といえる。一方こうしたリゾート開発と同時に全国で盛んになっていた「むらおこし」運動¹⁾も、1985年以降伊王島町で積極的に試みられるようになった。とりわけ1987年には、行政側によって「ふるさと祭り」や「健康祭り」等様々な地域おこしのための仕組みが作られ

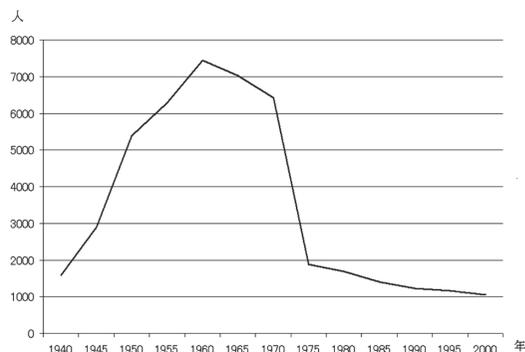


図1 伊王島町の人口推移

（伊王島教育委員会（1982）、西彼杵郡伊王島町編（2004）より筆者作成）。

た²⁾。

さて「ルネサンス長崎・伊王島」の開発に伴い、観光施設以外の島の風景も一変した。「スペイン風高級リゾート」を演出するため、島の玄関口である伊王島港周辺をはじめとして、町ぐるみの景観の統一がなされた（鈴木 2008, 図2）。現在島内を歩いていると、交番や郵便局、教育施設等の公共施設はもとより、橋の欄干や個人商店、民家の中にも、「スペイン風」に改築された建物が見られる。一方、炭鉱時代に使用された炭鉱住宅は老朽化を理由に取り壊され、跡地には新しく市営住宅が建設された。「『暗い』イメージが付きまとう炭鉱の風景は、観光地化を目指す島の政策にとって妨げになるもの。島全体がリゾート地の雰囲気を出していきながら次々と消えていった」と、話す島の男性もいた。現在炭鉱業時代の島の様子を知らうとするならば、島内の開発総合センターの一角に設けられた資料コーナーに行くしか方法はない³⁾。

以上のような伊王島町の試みは、ちょうど日本経済が高度成長期の頂点にあったことも幸いして軌道に乗った。だが島一丸となって推し進められたリゾート開発は、2000年以降日本の社会経済状況の悪化により行き詰っていった。そして2002年ついに「ルネサンス長崎・伊王島町」は閉鎖さ



図2 現在の伊王島町の風景（伊王島港の様子）

(2008年9月筆者撮影)。

れた（鈴木 2008）。

その後伊王島町では町長の池下氏が中心となり、後継を引き受ける企業を求め奔走した。離島であるがゆえにかかるコストの問題や送迎の問題などにより企業誘致は難航したが、2003年大阪に本社を置く総合レジャー会社「カトープレジャーグループ」(KPG)が再興に協力することが決まり、県の支援のもと、町が施設を買い取ってKPGに運営委託させることになった。新装された施設は「長崎温泉やすらぎ伊王島」と命名され、その名の通り温泉を中核とした、冬でも楽しめる通年型リゾートを志向するものであった（鈴木 2008）。同施設は、開業以前にいったんは11万人まで落ち込んだ訪問者数を2007年には25万5千人まで回復させ、2008年にはさらにこれを上回る訪問者数が予想されるという（長崎新聞 2008年9月9日付）。現在では島の新たな特産品としてオリーブの栽培を始めるなど、島の魅力向上に取り組んでいる。2011年には伊王島町と香焼町を結ぶ伊王島大橋が開通し、今後、離島振興法から指定解除される予定である。

III 「伊知の会」の実践

1. 創作太鼓グループ「伊知の会」の概要

伊王島町が変貌していくなかで、「伊知の会」の活動はどのように始まったのだろうか。ここでは「伊知の会」元メンバーで理容業を営むA氏と、伊王島町の行政職員のB氏（ともに男性、伊王島町在住）からの聞き取りをもとに、「伊知の会」の活動の概要と、そうした活動の前提に、彼らの島へのどのような思いがあったのかを明らかにしていきたい。

A氏は1946年に福岡県大牟田市に生まれた。両親は理容業を営んでおり、A氏が生後6カ月のとき既に伊王島町の炭鉱の勤労課で働いていた親戚に勧められて伊王島町に移ってきた。「当時伊王島町は炭鉱でにぎわっていた。それにも関わらず当時は島の中に床屋は1軒しかなかった。そこでなら商売も成り立つんじゃないかと話があって」とA氏は語る。その後島にはA氏の家のほか、理容業を営む家が7軒、パーマを専門とする店が2軒現れた。その当時の状況について、A氏は次のように説明する。

炭鉱で働いていた人たちの収入はわりと良かった。それでいて炭鉱住宅や光熱費なんかは一切かからない。しかもそうした人たちは「宵越しの金は持たない」という気持ちを持っていた人が多かったから、島の中だけで商売が十分成り立った。

A氏の両親のように炭鉱の島での商売に期待をかけて移住してきた人たちは少なくなかったという。こうして島の人口は徐々に膨れ上がり、A氏の弟が小学校に通っていた頃には、現在は12～13人しかいない児童が1,300人あまりもいたという。そのため教室の数が足りず、プレハブ校舎の増設や、午前と午後で児童の入れ替えをして授業を行うということもあったそうだ。

このように炭鉱業によって活気にあふれていた伊王島町だったが、炭鉱閉山後の凋落振りは島民の目から見てもはっきり分かるものだった。炭鉱

での職を失った人たちや彼らを顧客として商売を営んでいた人々が次々と島を去っていったという。「島の夏の一大イベントであったペーロン大会⁴⁾も次第に行われなくなっていった。炭鉱から得ていた固定資産税なんかが得られなくなって、行政の財政が逼迫したからじゃないか」とA氏は考えている。

こうした状況のさなかに、「伊知の会」は1987年、地元の30歳代後半から40歳代始めの住民8名(男性6名・女性2名、自営業、公務員、主婦等)が集まって結成された。そのきっかけはメンバーの一人であったA氏が、東京で開催された全国商工会の大会で、大分県湯布院町(現大分県由布市)の創作太鼓「ゆふいん源流太鼓」の演奏を見、触発されたことだった。この経験について、A氏は次のように語る。

「ゆふいん源流太鼓」も商工会の青年たちが演奏していた。こんなにすごい芸能があるんだ、と衝撃を受けた。島の現状を行政や議員のせいにはばかりするのではなく、自分たちも自分たちにできることをやってみたいと思った。

A氏はそれまでも「島おこし大学」に参加するなどして、島のまちおこしについて模索しているところだった。「若者の流出を何とかしなければならぬ、それには島を何とか活性化しよう」という強い思いもあった⁵⁾。そしてA氏と同じく町の商工会メンバーだった他の2名が中心となって練習が開始された。

「伊知の会」というグループ名称には、「知恵を出し合って町を活気づけよう、そしてその一番手となろう」という思いが込められている、とB氏はいう。「一番手」という意味には、自分たちの活動に続く、二番手、三番手も現れて欲しい、という願いもあった。また氏によれば、太鼓名の「いおう海龍太鼓」という名称は、活動が始まった1987年が辰年だったことと、長崎市内にある諏訪

神社で毎年行われる秋季大祭「長崎くんち」で奉納される、「龍踊り」に由来している。

活動開始当初は満足に道具もなく、メンバーが商う店から出た段ボール箱を利用したり、その頃にはすっかり出番も無くなった町内の各地区に保存されていたペーロン用の小太鼓を利用したりしていた。「太鼓の音がうるさいと言われて、島の中を車でぐるぐる回って練習場所を探した。浜辺まで行って車のライトで辺りを照らしながら練習をしたこともあった」とB氏は語る。少人数で苦勞しながら始めた創作太鼓だったが、次第に島の住民に知られるところとなり、練習開始から2ヵ月後、町で開催されたふるさと祭りでも演奏をしたことが初披露となった。こうして創作太鼓として「いおう海龍太鼓」の形が整い始めるうちに、太鼓で島をPRしていくことを考え始めた、とA氏は語る。B氏によれば、その後も断続的に演奏依頼があり、前述したような町の地域おこしのイベントだけでなく、長崎市内で演奏したり1988年には県の観光課からの要請を受けてJR九州が主催する「観光キャラバン隊」に数日にわたり参加したりしている。「観光キャラバン隊」とはJRが行ったキャンペーンで、「伊知の会」はこの時、長崎の歴史や文化を他県の人によく知ってもらおうと、大阪、京都、広島などの都市をめぐる県のアピールをした。さらに1990年に開催された長崎旅博覧会では、県内の市町村の代表が伝統芸能を披露する「市町村デー」で伊王島町代表として「いおう海龍太鼓」を披露した。こうしたイベント活動のほか、1988年以降は長崎市内のホテルと契約を結び、宿泊客の前で演奏するというも行った。「今当時の演奏をビデオで振り返ると腕も未熟だし不満も多い。でも当時は呼ばれて演奏できることが嬉しかった。島のアピールにつながると思った」。当時の様子をA氏は懐かしげに振り返り、次のように述べた。

湯布院や大村(長崎県大村市)の自衛隊内に

ある太鼓グループ「松竹ホーク太鼓」のもとに通って指導を受けた。当時は商工会の青年部に対して県から研修費が出た。行った先の各家庭で話を聞いてまわった。村おこしに成功したまちとか、いろいろな場所に行って様々な人と交流できたことが一番の財産。

こうして活動が活発になるに従い、活動から資金を少しずつ貯めて、太鼓や衣装などの小道具も徐々に揃えられるようになった。「1回のイベントの公演料で5万から10万くらいもらえた。このお金にメンバーたちのポケットマネーを加えて、大太鼓を買った」とA氏は話す。彼は次のようにも語っている。

衣装は最初は安物の作務衣の袖の部分の部分を切って利用していた。胸に白字で入れた「伊知の会」という文字は、メンバーで主婦の女性がアップリケで拵えた。最初の衣装はペラペラの生地だった。道具については何も無いところからアイデアを絞って考えた。

このほか行政の側から資金面で援助が得られることもあったという。

だが「伊知の会」の演奏依頼が集中したのは大体2、3年程度だった、とA氏は語る。1998年ごろには活動は殆ど行われなくなっていたという。そこには、活動当初は30歳代～40歳代だったメンバーたちも年齢を重ね次第にそれぞれの家業や職場での立場が重くなっていく中で、太鼓の練習に時間を割きにくくなっていったこと、またメンバーたちの職業が多種多様で、練習時間を合わせる事が難しかったこと等があった。2002年頃からはメンバーは各自で活動を行うようになり、IV章で後述するように、B氏は島内の中学校で太鼓の指導を始めたり、またあるメンバーは「長崎温泉やすらぎ伊王島」の従業員に太鼓の指導を行ったりしている。

B氏は「伊知の会」の活動を振り返り、活動の役目として島の活性化と島の宣伝活動であると認識していたこと、また「島が元気になった現在、役目は終わったのかなというのが実感」と述べている⁶⁾。A氏も活動を振り返って、次のように語る。

自分たちは自分たちの方法で伊王島の手伝いができればと思った。1回5万円位の公演料で島の教会の写真をプリントしたテレホンカードを成人式に配ったり、島の公園につつじの苗を植える運動をしてみたり、といったことをしたこともあった。(西武セゾングループによる)海洋牧場計画が出たりするたび、自分たちは(島が活性化するのではないかと)夢を見てきた。大体青写真で終わることが多かったが、だから島が観光化政策に乗り出して島の風景が変わっていったときも特に違和感を持たなかった。

2. 「いおう海龍太鼓」で表象される伊王島町
八木(1992)によれば、創作太鼓においてふるさとを表象する方法として、演奏で奏でられる音をはじめ太鼓名(「伊知の会」の場合「いおう海龍太鼓」)や自己紹介文等の言語表現、そして動作や衣装などの視覚的パフォーマンスがあるという。そこで本稿ではこの八木の視点を参考に、1)名称、2)音の演出、3)動作の演出、4)衣装の4点について検討する。以上の観点から、「いおう海龍太鼓」がいかに伊王島町を表象しているのか分析を行う。

1) 名称

Ⅲ章1節で述べたように、「いおう海龍太鼓」という名称は活動が始まった年が辰年だったこと、長崎市内にある諏訪神社で毎年行われる秋季大祭「長崎くんち」で奉納される、「龍踊り」に由来している。

2) 音の演出

Ⅲ章1節で述べたように、「いおう海龍太鼓」

では活動当初は道具が十分に揃っていなかったため、ペーロン用の小太鼓を利用していた。しかしメンバーの話によれば、ペーロンの小太鼓を利用したのは、「長崎の伝統文化・行事であるペーロンのイメージを演奏に盛り込みたい」という思いもあったからだという (B氏)。ペーロンが島の人々にとって特別な意味を持つものだったという事は、A氏の次の語りからも明らかだ。「ペーロンといえば『男の華』だった。ペーロン大会で船に乗って始めて一人前と認められた。大会の日には競技に参加する人達だけでなく、見物客で浜がにぎわった」。

このほかペーロンのイメージをより強めるための工夫として、演奏最後のハイライトのシーンで銅鑼を叩くという演出をしている、とB氏は語る。これに対し一方のA氏は、「曲に10分程度の長さを持たせようとして、最後の2~3分をどうしようか悩んだ。そのときに思いついたのがペーロンの(銅鑼の)音をつけるということだった」と語る。両氏の意見には食い違いがあるが、かつては夏の風物詩だったペーロンの存在が島の人達にとって決して小さなものではなく、それゆえ曲作りの際にも積極的に用いられたと考えられる。

3) 動作の演出

B氏によれば、「いおう海龍太鼓」の振り付けには、何カ所かにわたり伊王島町の特産である伊勢エビ漁の情景をイメージしたものが盛り込まれているという。例えば船の櫓を漕ぐときの動きや、闇夜を照らす灯台の明かりの揺らめきを、手の動きで表現している。

4) 衣装

当時の活動の様子を写した写真を見てみると、メンバーは男性も女性も、青地の生地で作務衣を着、腰と頭に白いロープ(女性の場合頭のロープは白と赤の縞模様)を結わえていた(長崎新聞社1991)。これはA氏によれば、着物の青は海の色を、腰に結わえたロープはメンバーが所持する船で使っていたものを用い、船のイメージを演出し

ているという。

以上から「いおう海龍太鼓」が表象する伊王島町のイメージを整理すると、「長崎くんち」の「龍踊り」、ペーロン、伊勢エビ漁、海・船、となる。このような海や漁のシンボルの取り込みについては、最終章で分析する。

IV 地域における「いおう海龍太鼓」の受容

本章では、「伊知の会」が演奏してきた「いおう海龍太鼓」が地域の中でどのように受け止められてきたのかを明らかにしたい。伊王島町にある長崎市立伊王島中学校では、2007年度から総合的な学習の時間の地域学習の一環として、創作太鼓に取り組んでいる。実施1年目に「伊知の会」のメンバーであったB氏に学校に来てもらい、太鼓のリズムや叩き方について教わったという。2年目にあたる2008年度は教員のみが指導にあたり、中学校の1年生から3年生までの全生徒11名が練習に取り組んでいる。筆者が聞き取りを行った時期はちょうど町で行われる運動会直前にあたり、筆者が来校したのは指導を請け負っているC先生のほか2名の教員が加わって、全生徒を集めて体育館で練習をしている最中であった。

C先生によれば創作太鼓を授業に取り入れた理由は、毎年長崎市で開催される合同音楽会で他校の生徒たちの合唱に太刀打ちするためだったという。「他の中学校からは学校の中から選抜された生徒たちが参加してきている。少人数しか生徒のいない伊王島中の生徒全員が活躍するためには、全員が演奏に参加できる太鼓を演奏するのがよいと思った」とC先生は語る。演奏する太鼓名は教師と生徒と一緒に考え、「海響太鼓」と名付けられた。「伊王島のイメージと言ったらまず海なので」とC先生はいう。

C先生に「伊知の会」のことについて伺ったところ、先生自身は「伊知の会」についてそれほど知らず、周りにも詳しく覚えている人はいないよ

うだという。ただ授業で創作太鼓に取り組むことを決定した際、当時まだC先生は伊王島に着任していなかったが、学校の中で『伊知の会』の方々が昔からやっていた伊王島の太鼓を生徒に継承させたい」という声があり、町の教育委員会に以前「伊知の会」に携わっていたB氏がいることを知って、氏に指導を依頼したという。

C先生に話を伺った後、先生に案内されて体育館で生徒たちが練習している様子を見せてもらった。やぐら太鼓、締め太鼓、平太鼓、大太鼓といった太鼓がちょうど三角形になるよう配置され、正面には大太鼓が4台並んでいた。その横には銅鑼が置かれていた。C先生は「生徒たちが卒業してメンバーが抜けても翌年困らないように、どの太鼓を誰が担当するかは学年関係なく決めている」、「総合学習の時間が削減されても、太鼓の練習時間だけは確保したい。ゆくゆくは教師がいなくても上級生が下級生に指導し、『海響太鼓』を伝えられるようにしたい」と話した。今年で2年目となる伊王島中学校の「海響太鼓」の町での評判はよく、地域からも「今年はどうか」と期待されており、太鼓の練習の音も中学生がやっているからと地域の人たちの視線も寛容だ、とC先生は語った。

V おわりに

これまで、伊王島町の住民によって行われていた創作太鼓「いおう海龍太鼓」が地域社会のいかなるコンテクストの中から生まれたのか、またどのように活動を行い、演奏によっていかに郷土・伊王島町を表象してきたのかを検討してきた。

かつて炭鉱によって栄えた伊王島町はこれが閉山すると急激に衰退した。「いおう海龍太鼓」はこうした状況に直面した地域住民たちの、「島を何とか活性化させたい」という思いから生まれたものである。まさに、ハーヴェイ（1997）のいう「現実の空間の安全性が危機にさらされた場所」に

おいて、その住民たちが「場所の意味とは何か」を考えた結果が創作太鼓の活動にあったといえるのではないだろうか。

「いおう海龍太鼓」では町を思い浮かべる際にイメージしやすい、「長崎くんち」の「蛇踊り」やペーロン、伊勢エビ漁、海、船などのイメージがその太鼓名や音、衣装のなかに多く盛り込まれた。こうした海や漁などのイメージを演奏に盛り込むことは当時長崎県で活動していた他の創作太鼓グループにも共通する特徴である（八木 1994）。八木はこれを「町民であれば容易に了解できイメージできる情景や風景が、そして感情移入の可能な故郷の象徴が、きわめて素直に対象化されている」（八木 1994: 36）と指摘する。これは伊王島町の「いおう海龍太鼓」においても、当てはまると思われる。また演奏中随所で鳴らすペーロン用小太鼓や銅鑼の音には、炭鉱が閉山する以前は町で活発に行われていたペーロンを懐かしむメンバーたちの思いもあったようだ。

次にこうした「伊知の会」の活動がその担い手たちや他の地域住民たちにとってどのような意味を持つものなのかを考えてみると、八木（1994）が指摘するように、まず地域住民自らが創作太鼓を通じて積極的に地域に意味を与えていることが挙げられる。「伊知の会」の活動自体は現在休止中で、地域住民の間で「伊知の会」のことを詳しく記憶している人はそれほど多くはなさそうである。だが創作太鼓を通じて地域を表象していくという行為自体は、島の子どもの間でも今後も受け継がれていく見通しだ。またA氏が「（「伊知の会」の活動に参加することを通じて）色々な場所に行って様々な人と交流できたことが一番の財産」と述べていたように、創作太鼓の活動を契機として地域住民たちが他所の土地へ出かけ、同じように地域振興に関心を持つ人々と積極的に交流し刺激を得ていたという点も、「伊知の会」の活動の意義のひとつとして述べておきたい。

謝辞

本稿は2008年9月に長崎市周辺で実施した、お茶の水女子大学フィールドワーク演習での調査内容をもとに執筆した。本研究を進めるにあたり調査に協力して下さった長崎市伊王島町の皆様に厚く御礼申し上げます。とりわけ筆者の聞き取り調査に快く応じて下さった「伊知の会」のAさん、Bさん、そして伊王島中学校のC先生と練習風景を見せて下さった生徒の皆さんには大変感謝しております。AさんとBさんにおきましては、調査や本稿の執筆にわたり何度もお話を聞かせていただいたり、原稿をチェックしていただいたり、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

また調査を行う際の事前学習におきましては、授業を担当されていた水野勲先生・宮澤仁先生にご助言をいただきました。本稿執筆に当たり協力して下さった皆様に、ここに記して御礼申し上げます。

注

- 1) 高度経済成長期に激しい人口流出に見舞われた過疎地域を活性化させるため、中小企業庁は1984年、地域小規模企業活性化推進事業(村おこし事業)を推進した。その原型は、昭和50年代から始まった大分県の一村一品運動等がある(西野 2008)。
- 2) 伊王島町で聞き取りを行ったB氏の話による。
- 3) こうした伊王島町の炭鉱の記憶に対する姿勢は、近隣でやはり炭鉱業で地域経済が支えられていた高島(長崎市高島町)とは対照的である。高島町では石炭資料館を設置し、過去の島の様子を伝える写真や映像資料のほか、炭鉱で使用された道具や炭鉱組合の記念品などを保存している。
- 4) ペーロンとは古く中国から伝えられた競漕と、その船を指す。長崎地方では、大漁祈願のためにするもの、竜神まつりと称するもの、「足あらい」と称して田植えの済んだ後に行うもの等様々なペーロンがあ

るが、現在は6月初めから8月中旬頃まで各地、各町内で実施されており、7月最終日曜には長崎ペーロン選手権大会が長崎港で行われ、各地区の選抜チームが競いあっている(社団法人長崎国際観光コンベンション協会HP)。

- 5) 長崎旅博覧会の際に作成された、『活き活き長崎 79市町村のプロフィール』(長崎県総務部地方課 1991)による。
- 6) 筆者とのメールのやり取りによる。

文献

- 伊王島町教育委員会編 1972. 『伊王島町郷土史』伊王島町。
- 久島桃代 2010. 自地域学「会津学」の活動とその理念. 季刊地理学62(3): 127-138.
- 社団法人長崎国際観光コンベンション協会. <http://www.at-nagasaki.jp/nitca/peron/qu/qu.html> (最終閲覧日: 2011年11月15日)。
- 鈴木勇次 2008. 長崎県伊王島の開発の経緯と離島指定. 地域総研紀要6: 5-16.
- 長崎県総務部地方課 1991. 『活き活き長崎 79市町村のプロフィール』長崎県市町村振興協会。
- 長崎新聞社 1991. 『ふるさとが燃えた '90長崎旅博覧会』
- 西彼杵郡伊王島町 2004. 『伊王島町閉町記念誌 ふるさと伊王島町のあゆみ』伊王島町。
- 西野寿章 2008. 『山村地域振興論』原書房。
- 西原 純 1998. わが国の縁辺地域における炭鉱の開山と単一企業の崩壊—長崎県三菱高島炭鉱の事例. 人文地理50(2): 1-22.
- 前川雅夫 1990. 『炭坑誌—長崎県石炭史年表』葦書房。
- 宮本憲一 1990. 国際化時代と地域政策. 宮本憲一・横田茂・中村剛治郎編『地域経済学』351-369. 有斐閣。
- 八木康幸 1994. ふるさとの太鼓—長崎県における郷土芸能の創出と地域文化のゆくえ. 人文地理46(6): 23-45.
- Harvey, D. 1993. From space to place and back again:

Reflection on the condition of Postmodernity. In *Mapping the Futures: Local Cultures, Global Change*, ed. J. Bird, B. Curtis, T. Putnam, G. Robertson, L. Tickner, 3-29. London and New York: Routledge. ハーヴェイ, D. 著, 加藤茂生訳 1997. 空間から場所へ, そして場所から空間へ: ポストモダニティの条件についての考察. 10+ 1 10 : 85-104.

くしま・ももよ

お茶の水女子大学大学院・博士後期課程

The Drum Troupe Activities of Ichino-kai and its Meanings: A Case Study of Ioujima-Cho, Nagasaki City

KUSHIMA Momoyo

(Graduate Student, Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)